町の『おせっかい』が育つ

園長　野中　泉

先日のことです。夕方の暗くなりかけた事務室の窓から、５・６人小学生顔をのぞかせました。卒園児の３年生の子たちです。見ると、その真ん中にアトムの在園の小さな男の子がお兄ちゃん、お姉ちゃんに手をつないでもらってニコニコ立っています。

「この子な、暗くなってもお母さんが迎えに来ないねん」「お母さんいないっていうけど、近所の子かもしれん」「アトムの子じゃないかな？と思って連れてきた」と口々に教えてくれる子どもたち。

実は、その日、その子はお母さんの体調不良でお休みでした。なんと、お母さんが薬を飲んでウトウトと寝てしまったほんの少しの間に家のカギを開けて外に出てしまっていたらしいのです。

急ぎ、連絡をしたお母さんはこの寒空にひとりで我が子を探し回っていた最中でした。我が子の無事を確認し「よかった」と膝の力が抜けて座り込むお母さん。私たちも大事がなかったことにホッと胸を撫でおろしたのですが、何より、卒園児たちの優しい「おせっかい」に感動してしまいました。

今回だけではありません。登校途中に転んで両足を大きく擦りむいた友だち（他園の出身）を「バンドエイド貼ってあげて」と連れてきたり、長池のちびっこ広場で野球をしていたら金属バッドが頭にあたり大流血した近所の小学生男子の大ピンチに「大変だ！」とすぐにアトムに大人を呼びに来てくれたり（この時は、手分けして同時に男の子の家にも知らせに走るというファインプレーもありました)、卒園児たちの優しいおせっかいとその行動力に、驚かされることは少なくありません。また同時に「アトムに行けばどうにかなる」と子どもたちが寄せてくれている信頼にもうれしくなります。

年度末、卒園を控えた５歳児クラスでは小学校への引継ぎ資料を保護者と共有する懇談会を毎年開きます。この引継ぎ資料は、他園では我が子の分も親に開示していないことが多いと聞きますが、アトムでは３０年前の無認可時代に５歳児保育を始めた当初から、全員の資料をクラスの親みんなで共有し続けてきました。もちろんいいことばかりでなく「自己中心的な面がありトラブルになりやすい」とか「言葉で伝えることが苦手で、カッとなると手が出てしまう姿がある」など、苦手なことや課題も率直に書かれた資料をお母さんたちと共有する懇談会のことを他所で紹介すると、大概とても驚かれます。実を言うと外から来た園長の私もとてもびっくりしたひとりです。でも、初めてこの懇談会に出た５年前、当時の５歳児担任保育士が「この子たちの、いいところだけでなく、弱いところや苦手も、その子丸ごとを知ってくれている大人が地域にたくさんいることが安心につながると思っています。もし、アトムの子の誰かが卒園した後に失敗してしまったり、トラブルになったり、『どんな子なん？』と誤解されそうになった時にも、この子にはあかん面もあるけど、こんな良いところもあるよとおせっかいしてくれる大人に、みなさんになってほしいです」と保護者に向かい真摯に語る言葉を聞いて、胸がいっぱいになったことを思い出します。

ひとが変われば、町は変わる。優しい「町のおせっかい」に育っている子どもたちの姿に励まされながら、今日も「おせっかい」な大人でありたいと願っています。